

生徒指導における校内体制について

—— 学級担任を支える校内体制 ——

足利市立富田中学校 船田英世

1. はじめに

生徒指導の直接の担当者は、言うまでもなく学級担任である。40人もの生徒は、大なり小なり「問題」を抱えている。学級担任は、日々それらの「問題」に直面する。学級担任は、その責任感から、ひとりでその解決を試み、「成功」を取めたり、「失敗」したり、悩み続ける。学級担任が、特にエネルギーを要する「生徒指導上の問題」がある。不登校生徒と、「非行」を重ねる生徒である。前者が「非社会的」問題行動であり、後者が「反社会的」問題行動である。

同じ学級に、両者が複数存在することは、珍しくない。そんな時の学級担任の立場に筆者自身立たされたことが何度かあった。幸いにも、筆者は周囲の先生方に助けられ、導かれ、何度も叱られながら、常に支えられてきた。そのなかで学び得たことを、本稿ではまとめていくことにする。なにぶんにも、非力で、自分なりに（自分のスケールで）まとめることしかできず、お世話になった先生方からお叱りを受けるのを覚悟して、学級担任を支える校内体制を、「非社会的問題行動」と「反社会的問題行動」に分けて考えていきたい。

2. 非社会的問題行動に対する指導：不登校（登校拒否）生徒

(1) 校内指導体制づくり

ア. 学級担任を支える学年組織と生徒指導組織（養護教諭を含む）

不登校生徒の指導は、時間がかかり、根気がある。そして、「解決」（何を以て「解決」というか難しい問題である）のめどが立ちにくく、学級担任がひとり悶々とすることが多いのではない。たとえ、学級がうまく経営されていても、誰も座っていない机が大きく見えて、心から喜べないものだ。学級担任が心に余裕をもって、不登校生徒に（その保護者に）接することができるように、校内で「チーム」を作って対応するとよいと考える。

まず、学年主任が学級担任へ、「一緒に頑張っていこう。」という姿勢を示すこと。そして、生徒指導主事と連携して指導にあたることが望ましい。生徒指導主事は、校内の生徒指導の指導・助言者であり、不登校生徒への指導の経験も多いであろう。また、様々な研修会に参加しており、適切なアドバイスを与えてくれるであろう。養護教諭は、不登校生徒が「保健室登校」を試みる場合や、学級で疲れた心を保健室で癒すことも、十分に予想されるから、日頃から指導の経過を知らせ、アドバイスを受けておきたいものだ。

学年会議で、学年職員へ指導の経過を常に報告しておくことも、重要である。当該学級担

任の取り組みを知らせることによって、学年職員の協力も得やすくなり、学級担任が「孤立感」を持つことも少なくなるはずである。

もし、同学年に不登校生徒を抱える学級担任が他にもいたならば、学年主任を仲立ちに、情報を交換することもよいであろう。

生徒指導主事は、校内で不登校生徒を抱える学級担任を集め、「情報交換会」を主催するだけでも、学級担任たちへの援助になると考えてもよいと思う。

学年主任、そして学年組織、加えて生徒指導主事という広がりの中なかで、学級担任を支えることが、不登校生徒（保護者も）を、大きく支えることになると思う。

イ. 校長・教頭への報・連・相（ハウレンソウ）

こうした校内体制を作るにあたって、学年主任や生徒指導主事が校長・教頭との「ハウレンソウ」を欠かさず行うことは、無論である。「ハウレンソウ」とは「報告」・「連絡」・「相談」を指すことであることは、言うまでもない。校長・教頭からの温かい指導・助言、そして、学級担任への励ましの言葉で、学級担任も腰を据えて、じっくりと指導することができると思う。教師としての大先輩である、校長・教頭から見守られることは、学級担任を強く支えることになる。

ウ. 全職員の共通理解

さて、校内での指導体制ができ、動きだした。不登校生徒を未だ持ったことがない職員も校内にいるであろう。また、不登校生徒の指導の経験があるが、それを他の職員が知らない場合もあろう。また、ある不登校生徒についての当該学級担任の指導を知らなかったり、その不登校生徒の存在自体を知らない職員もいるかもしれない。なんらかの弊害が生じかねない場合もあろう。そこで、不登校生徒への指導方針・経過を全職員に周知する必要がでてくる。

職員会議で、適宜、簡単な報告を行っていくことはもちろん、現職教育の場で「事例研究」会を開くことも大切である。会では、学級担任が資料を用意し、生徒指導主事が司会を務め、指導・助言者を招く（市教委・県教委から）。これは、単に当該生徒の、その指導の、共通理解に留まらず、生徒指導一般についての研修会としても耐えうるものとなるはずである。

不登校生徒への指導・援助の「方法」には、「定式」が見あたらない。しかし、不登校生徒への指導・援助の「基本」は、あるような気がする。

(2) 学級担任の基本的姿勢

ア. 不登校生徒とその家庭にとってのキー・パーソンとしての学級担任

「不登校生徒への指導を、チームで進めるべきだ。」という本稿の主旨と一見矛盾するよう

だが、不登校生徒とその家庭（特に母親）にとって学級担任は、最も重要な存在である。

このことは、指導を進めるなかで繰り返し確認されるべきポイントである。生徒と家庭にとって学校との大動脈は、学級担任である。だから、例えば「適応指導教室」へ通級することになっても、「どうですか、元気で頑張ってますか。」という、原籍校の学級担任からの一声は、なにものにも代えがたい学校からのあたたかいメッセージなのである。母親は、家庭では子育てを一任されている場合が多い。そこで、学級担任が母親と「共に」生徒を見守ってくれることだけでも、学校との固い絆を実感するだろう。母親の孤立感は、軽減されよう。指導を生徒指導主事や学年主任、教育相談員その他のスタッフの協力に、学級担任が「任せよう」ことは、万が一でもあってはならないことであろう。

また、学級担任の粘り強い取り組みの姿勢は、チームのスタッフへの何よりの「動機づけ」となり、チームを活性化することに留まらず、事例研究等によって校内の全職員の意気を高揚させることにもつながることであろう。

イ. 学級経営上の留意点

ある学級担任は、不登校が半年以上続くなか、学校の諸行事の係や委員に必ずその生徒を入れている。当たり前のことのようだが、すばらしい配慮である。学級の生徒たちは、「担任の先生は、あの子を絶対忘れない。」と知る。また、家庭訪問を週3、4回続けている。もちろん長期休業中でもある。100回にもおよぶ回数である。学校からの通知は、全部届け、返事の必要な場合、必ず返事を取りに出かけていく。家族全員と気軽に話しができる関係を築いている。したがって、学年部会や保護者の学級対抗のスポーツ大会にも、母親が出席している。そんな場での、学級担任と不登校生徒の母親の自然な会話の様子は、学級の他の保護者にどんなメッセージを投げかけるのであろうか。そして、学級の生徒達のみならず、その保護者達は、そんな学級担任から何を感じるであろうか（学ぶのであろうか）。

不登校生徒を「温かく待ち続ける学級づくり」と、一言で言えば簡単である。しかし、それは、形ではなく、日々の学級経営のなかで、不登校生徒に留まらず、生徒ひとりひとりを大切にす学級担任の姿勢が基本である、と言えるのではなかろうか。

ウ. 当該生徒の理解と方法

(ア) 理解する主な生徒の特質：生徒理解のないところに生徒指導はない。学級担任が生徒を理解しようとする時はまず、以下の項目は押さえておきたい。

- ・問題行動の発生から今までの経過
- ・家庭環境：できれば立体的に・家族構成：できれば年表的に
- ・生育歴・家族の歴史
- ・知的能力、学力、行動、性格
- ・対人関係：孤立、内閉傾向、協調性、自己顕示傾向、親和性、集団行動への参加、友人関係、親子関係、教師生徒関係。

(イ) 生徒理解の方法（参考文献1）

- ・観察法：とくに家に閉じ込められた生徒の場合，どんな場面・時刻で緊張の度合いが変化するのか，外出できる場合も，どんな場所・時間帯でなのかを，母親や父親に観察してもらい，記録してもらおう。
- ・面接法：原則として一対一の言葉によるコミュニケーション，遊戯療法のように一緒に遊ぶことができると，感情・情緒の交流が生まれやすい。家族全員とできればなお良いように思える。家族システム論的アプローチには特に必要である。
（参考文献2）
- ・調査法：(ア)のなかで，保護者に応答できる項目を用紙に書いてもらう。事例研究も含める。
- ・検査法：知能・性格・行動・学力などを測る標準化されたテストを実施する。これは，学級担任がテスト・バッテリーを生徒宅へ持ち込むことで可能であるが，生徒の同意と趣旨の説明が必要であろう。
- ・業績法：なかでも，森田療法で行われるような，日記をつけさせることなどは，実行が可能であろう。（参考文献3）

(ウ) 留意点

学級担任は，指導の時間の経過とともに，生徒への理解が深まっていく。学級担任の理解が深まるということは，理解の内容の変化を伴うと同時に，理解の方法も変化する。しかし，最も変化するのは，学級担任の生徒指導観というかアプローチの仕方というか，大げさに言えば人間観ではないだろうか。あとから振り返るとその変化のプロセスが曖昧になりがちである。そこで，指導の（あるいは理解の）記録をつけておくと良いと思う。

毎回の家庭訪問，生徒の様子，保護者との面接の記録を逐一，特に印象に残ったことなどを，箇条書き程度にまとめ，月単位で概括し，学期単位でさらに大きく概括しておく，興味深い洞察が得られることが多い。また，事例研究会を機会に中間報告を作成し，そこで出された様々な意見，助言をまとめておくことも大切である。

ある事例について，130件に及ぶ記録（四百字詰め原稿用紙で，120枚におよぶ）を取り続けている学級担任もいる。

同じワープロのソフトを用いれば，学級担任・学年主任・生徒指導主事が一枚のフロッピーを受け渡しするだけで，それぞれの立場での記録が一つの書類に残すことも可能である。時間に余裕のない現場では，特に有効である。

エ. チームの一員としての学級担任

チーム作りの例を一つここで，あげておく。あくまでも，特殊であって，一般化はできないのでことわっておく。

- (ア) 学級担任は，学校と生徒およびその家庭を繋ぐ絆である。そこで，生徒には登校刺激を与えず「やさしいおにいちゃん，おねえちゃん。」として，生徒に接する。

家庭訪問に行き一声掛ける程度でもいいし、関係が取れば「遊び相手」さらには「相談相手」でもいい。

- (イ) 学年主任は、主に保護者との面接を担当する。学級担任が同席していてもかまわない。母親と面接することが多いであろう。ここで一番大切なことは、初回の面接（あるいは学校へ招く際の電話）でも、「母親を支えたいのですよ。」という姿勢をしっかりと伝えることであろう。学年主任は、大抵は混乱し、不安に陥り、孤軍奮闘を余儀なくされている母親を温かく迎え、母親のカタルシスを促す。夫婦間の、あるいは家族間での悩みを共感的に聞き取ることだ。できるならば、定期的に週1回1時間程度、母親との面接を続けるといい。まずは、時間を多く母親と共有することで、徐々に関係を作っていくことである。

学年主任は、学級担任の立場を堅持しつつ、関われるところから学級担任をバック・アップしていく。そうした学年主任の姿勢が、学級担任の心にある程度の余裕を持たせ、不登校生徒へ関わろうとする意欲を高めると思う。

また、学年会議の際にも、指導の経過を学級担任に報告させ、その努力を学年職員の前で認めていくことで、学年内の共通理解が醸成されていくように思える。

- (ウ) 生徒指導主事は、学級担任・学年主任と簡単な「事例研究会」を校内で定期的に開く。文書作成が困難な場合には、口頭で行ってもいい。できれば、前述したように記録がワープロに入っていれば、それをプリントしておくだけで済む。生徒指導主事は、指導・助言者として、会に臨む。そこで、必要な情報を提供したり、校外に援助を求める窓口として両者に働きかけることである。

生徒指導主事は、足利市教育委員会や栃木県教育委員会をはじめ、様々な専門機関と太いパイプを作っておくことが望まれよう。

学級担任のなかには、学級で不登校などの問題を抱えながらも、一人で悩んでいる人もいよう。生徒指導主事は、不登校に関する資料を、適宜職員に配布したり、養護教諭と連絡を密にし、生徒の実態をいち早く把握し、該当する学級担任へ言葉をかけていくことが望ましいと思う。

文部省の資料では、生徒指導主事の資質を厳しく指摘している。(参考文献4)

- (エ) 養護教諭は、不登校生徒の保健室への登校はもとより、授業間での「休息場所」を提供し、温かい母性をもって不登校生徒へ関わってくれる、学校の「やさしいお姉さん」としての役割を期待される。

また、不登校生徒の早期発見の機会にも恵まれており、生徒指導主事、学年主任、学級担任が日頃から、積極的に情報を求めていくことも大切である。

- (オ) 校長・教頭は、チームの活動を把握し、適切な指導・助言を与え、チームを励ましていくことで、校内体制の最も重要なバック・ボーンとして大きな支えである。

(3) 専門機関との連携

ア. 足利市教育委員会

柳原小学校内に、「足利市学校教育相談室」が設置されており、専門の教育相談員が教育相談をはじめ通級指導まで担当している。学校教育課に所属している。不登校生徒の指導にあたる時きまず、一報を入れるべきである。

足利市立教育研究所では、「スーパー・バイザーによる教育相談」を実施しており、専門家による、教員対象の相談を受けられる。また、少年指導センターでは「精神科医による相談事業」も実施しており、専門の医師による相談を受けることができる。

イ. 栃木県教育委員会

安足教育事務所には、教職経験の豊富な教育相談員が、教育相談を実施している。また、校内の現職教育での事例研究会の指導助言をお願いすることもできる。

佐野北中学校内には、「アクティブ教室」(モデル教室)が置かれており、不登校生徒の通級指導を専門に行っている。教育相談員が3名おり、実践を続けている。市教委学校教育課が窓口となっている。場所は、佐野西中学校南側の佐野市教委学校教育課である。

また、総合教育センターも、相談を行っている。

ウ. その他

栃木県教育研究所(宇都宮市の教育会館内)、自治医科大学付属病院、県南児童相談所(栃木市)、国立療養所足利病院(大沼田町)、筑波大学学校教育部相談室(東京都文京区大塚)等。

3. 反社会的問題行動に対する指導：家出を繰り返し「非行」を続ける生徒

(1) 校内指導体制づくり

ア. 学級担任を支える学年組織と生徒指導組織

反社会的生徒の指導は、非社会的生徒の指導とは異なり、同学年の複数学級に問題生徒が存在し、また他学年の複数学級との関係もありがちなので、指導体制の組織はより大きくなるのが普通である。

学年主任のリーダーシップの必要性もかなり高く、そのもとに学年職員が一丸となって学年として指導を進めることが要求されてくる。

家出を繰り返し問題行動を続ける生徒。服装も校則に違反し、髪は赤茶色に脱し、耳にはピアスをするなど、いわゆる「ツッパリ」の女子生徒の指導をどうするか。

学級担任は、そうした「外見」の指導をすると学校をますます避けるようになり、指導のチャンスを失ってしまうということと、「外見」の指導をその生徒だけ「特別扱い」にはできない、また、他の生徒(学級の、学年の)への影響への懸念など、考え込むことになる。

当該学級担任は、この場面において、学年としての指導体制を必要とするし、同時に生徒指導部が学年としての指導方針をもとに、他学年との連絡に努めることが求められる。もち

ろん、学年や生徒指導部は校長・教頭との報・連・相を欠かせない。

そうしたバック・アップがあって、学級担任は学級担任としての指導方針や方法を明確に意識でき、学級担任本来の指導力を発揮できるのではないかと思う。

イ. 学年としての指導態勢

問題となっている生徒の指導については、まず学年主任がリーダーシップをとる。当該生徒は、服装等の違反を厳しく注意すると、無断早退をしてしまい、有職・無職青年のもとに走ってしまうことが多い。まず、指導の機会を作るという意味で、学級担任が「叱責せず、しかし見逃さず」指導を継続することについて、学年職員あるいは全校職員の理解を求める。また、学業不振がみられる場合は、授業中の机間巡視の際に教科担任は特に、「一声かける」ことにする。学級担任が、放課後などに個別指導を行うのもラポールづくりに役立つであろう。その場合は、学習指導中よりも休憩の際の「雑談」で、その生徒の個性を新たに発見することもある。一方、授業妨害にでた場合には、毅然とした態度で指導することを学年で確認し、説諭する際には他の生徒や職員の目に触れない場所で行う。

2の非社会的問題行動のところでもふれたが、生徒にとって学級担任の存在は、他のどんな職員よりも大きい。例えば、相談担当の職員とどんなにいい関係ができようとも、学級担任との関係がうまく行かなければ、生徒の心の安定は望めない。

学年職員は、当該学級担任を支え励ましこそすれ、けっして追いつめてはいけない。追いつめられた状態では、ますます学級担任は憔悴する一方であるし、当該生徒に対する指導も感情的になりやすくなることが多い。

学年職員が当該学級担任を励まし、支えていくことが問題行動の広がりをくい止めることになり、学年職員のまとまりの良さは、学年の生徒にも良い影響を与えるという二重の効果を生むのである。

学年主任は、学年副主任や学年の生徒指導係と連携して、学級担任を支え続けることが、この場合には学年経営の基本的姿勢だと考えるべきである。

ウ. 校長・教頭への報・連・相

まず、学年主任は日頃から校長・教頭とのコミュニケーションを密にしておくことである。そして、報告は正しく簡潔に、連絡は遅れずルートをまもり、相談は真摯な態度で続けることだ。学年主任の知らないところで、校長・教頭はバック・アップしていることを忘れてはならない。また、他の学年との意見調整の要になって苦心しているのである。学年主任は校長・教頭に対して、報・連・相を欠かしてはいけない。

エ. 全職員の共通理解

学校の規模にもよるが、特に大規模校では他学年の情報が入りにくいようである。漠然とした情報のもとでは、生徒指導上なんらかの弊害が生じやすい。また、他学年の生徒指導へ

の誤解も生じやすく、いわれない批判がでることもありうる。経験の少ない職員にとっても、いずれは直面する問題であるので、指導方針や指導経過など職員会議などの機会を有効に生かして、全職員の共通理解を図る必要がある。

事例研究会を、年数回、時間の許す限り、一事例に対してじっくり積み重ねていくべきである。生きた生徒指導の研修会となるであろう。

オ. 養護教諭・進路指導主事・部活動顧問との連携

いわゆる「ツッパリ」生徒にとっては、保健室・養護教諭の存在は大きい。

生徒指導における養護教諭の果たす役割はたいへん大きい。受容的な養護教諭のもと、本音で語り合うことで、生徒の心は安定していく。養護教諭と空き時間を利用して、情報を交換することに学級担任や生徒指導主事、学年主任は、努めるべきである。

また、進路指導主事が進学先について、細かな相談にのることも、生徒の学校のイメージをより温かいものにするだろう。

部活動の顧問も、例えば、大会前のメンバー登録の際には、必ず生徒を呼んで参加を呼びかけ、メンバー（あるいは補欠・マネージャー）にすることなどは、学級ばかりでなく他の集団への所属感を高めると同時に、学校での居場所がふえることで、心の安定につながるであろう。

「連携」という言葉よりも、そうした職員の温かい眼差しが、生徒の心をほぐすものである、と考えるべきであろう。

(2) 学級担任の基本的姿勢

ア. 当該生徒に対して

まずは、生徒の個性を「愛する」ことであろう。生徒を「見る（認知する）」とき、どんな教師でも、その生徒の「客観像」を知覚することは、希有であろう。人間の知覚・認知は「現象的知覚」である。例えばA先生がC子をどんな生徒と見ているか、B先生がC子をどんな生徒と見ているか、同じであることはなからう。とらえ方によっては、評価は様々である。まず、学級担任は生徒の個性を「プラス」に見ていくことである。

例えば、放課後C子が泣きながら「先生は私の気持ちなんて、ぜんぜんわかってない！」と学級担任に訴えてきたとする。

A先生は「まったく、おれは嫌われたものだ。甘えるのもいいかげんにしろ。」と感じた。B先生は「へえ、この子は私に自分の気持ちをわかってもらいたいのだ。素直な子だな。」と感じた。A先生とB先生、どちらがいい先生でしょうか、という問題ではない。どちらに心の余裕があるか、どちらがこの子の訴えに対して建設的に動けるかが問題である。もし、C子が先生を徹底的に嫌っていたなら、わざわざその嫌いな先生の顔をみなくてはならない場面をつくるだろうか。ひたすら避けて、無断早退したほうがましであろう。

次に、けっして生徒を見放さないことであろう。繰り返すが、生徒にとって、学級担任と

は学校の先生のなかで「好かれるか・嫌われるか」一番気になる先生なのである。

どんなに「裏切られた」と感じるがあっても、学級担任は、生徒を（生徒の成長欲求を）信じ続けることが肝要であろう。

イ. 当該学級に対して

学級内にこうした生徒を抱えると、学級担任は何を思うのであろうか。

反社会的問題行動を繰り返す生徒によって、学級が「破壊」されると思うか、それとも学級が「成長」すると思うか。学級の生徒たちは、学級担任が「問題児」にどう関わるかを見つめている。「傍観者」や「無関心」を装いながらも、学級担任の一挙手一投足を見て、自分達の学級担任を評価している、と言っては言い過ぎであろうか。

さきほどは、問題生徒を「信じる」と述べたが、これは学級担任にとっては学級の生徒「全員を信じる」ことでもある。言葉をかえるなら「学級の成長欲求」を信じることである。

学級担任は、「問題児」を抱えることで、疲れた顔で学級に向かってはならない。学級を明るいうムードにするのが学級担任の役割である。明るいうムードのなかに、問題を抱える生徒を包み込むよう努めることである。

学級担任は、自分の学級を好きだ、学級のすばらしい面をたくさん知っている。みんなそれぞれにいい「個性」を持っている。そんなふうに思っていると、生徒たちは、担任の見えないところで、当該生徒に関わってくれることがある。一時は、その生徒を恐がって避けていた生徒達が、一緒に買い物に出かけたりするように、行動をともにし始めるようになることがある。

「問題の生徒」への学級担任の真摯な関わり、そしてともすれば暗くなりがちな学級のムードを努めて明るくしようとする姿勢。例えば、学級の生徒全員の日記指導を欠かさず続け、チャンスをとらえては、声を掛けていくというような日頃の学級担任の積み重ねも、大切であろう。そんななかで、学級の生徒のうちの何人かが、いわゆる「問題の生徒」に関わろうという気持ちを自然と持ち始めるのではなかろうか。

学級のリーダーを「育てる」ことができる教師は素晴らしい。筆者は、しかしそのような指導力を持ち合わせていない。小学校で指導されたか、前年度の学級担任が育てたのか、気がつくともリーダーがいるようである。

学級のリーダーを育てるにはどうしたらよいか、恥ずかしながら筆者の今後の課題である。

学級担任は、学級へどのような対応をしたらいいかを考えるところであるが、現在のところ、「被害者意識」は持たないこと、明るく誠実に学級と向き合うこと、以上2点をあげることしかできない。

ウ. 当該生徒の理解と方法：2(2)ウと重複するのでここでは省略する。

エ. 保護者に対して

第一に、保護者を責めないことである。一番悩んでいるのは（本人以外では）親であろう。それも母親であろう。学校に呼び出された時の母親の気持ちを押し量れば、学級担任であ

れ、学年主任であれ、生徒指導主事であれ、まずは母親を支え、「ともに頑張っていきましょう。」という姿勢にならざるを得ない。仮に母親を責めれば、どんなプラスの展開が期待できるのか。学級担任が母親と話し合う、というより母親の話（気持ち）を聞き取ることが第一歩であろう。

そして、時には父親や母親にたいして「厳しい指導」が必要なら、生徒指導主事や学年主任、場合によっては校長がそれにあたって、学級担任はその後のフォローにまわることも大切だ。「構成主義」のアプローチをとり、保護者の前で、教員同士の「芝居」をうってみるのも一つの方法であろう。作為的に感じられる方もあろうが、なによりも問題の解決が優先されることも考えてもらいたい。（参考文献2）

- (3) 専門機関との連携：2(3)と重複するので省略するが、佐野北中の「アクティブ教室」では、反社会的問題行動や非行による「怠学」での不登校生徒は、対象としていない。

4. お わ り に

日々多忙を極める学校現場では、ところによっては生徒指導上の問題が山積し、生徒指導主事は、事後の処置に追いまくられ、一つ一つの問題にじっくり関わることは、不可能であろう。

また、学年主任も、担当した学年の状況によっては、ここで述べられたような関わり方も不可能であろう。

本稿の目的は、筆者が考えおよぶ範囲で、生徒指導主事や学年主任や学級担任を中核に、こんなふうに「チーム」をつくれれば、学級担任は助かるだろうし、そのチームを組むことで学級担任の今の経験をより確かに将来に生かすことができ、やがて生徒指導主事や学年主任の立場に立ったときは、そうした経験から学んだことが大きな支えになるかもしれない、という浅はかな願いをこめて、一度描ききることであった。

こうしてまとめてから思うに、改めて自分の限界を感じた。しかし、自分の「底」が見えた分だけ、まとめて良かったと、筆者自身は納得している。

自分でできないことをも、敢えて自分の「理想」としてまとめてみた。

諸先生方のご指導・ご鞭撻を、これからもお願いして、ペンを置く。

【参考文献】

1. 原野広太郎『教師のための児童生徒理解』金子書房 1989年
2. 長谷川啓三『家族内パラドックス』彩古書房 1987年
3. 増野 肇『森田式カウンセリングの実際』白揚社 1988年
4. 『生徒指導の手引き（改訂版）』文部省 1981、『生徒指導の推進体制に関する諸問題』中学校編 文部省 1975年

評

本論文は「生徒指導上の諸問題」に対して、「校内体制のありかた」を、学級担任および学年主任、そして生徒指導主事を含めて学校全体として、特に中学校における取り組みについて論述されております。学校における生徒指導機能がいかに働くべきか、日常の実践を踏まえて、その指導の糸口を丁寧にさぐっているものです。

「生徒指導上の諸問題」を「不登校生徒」と「反社会的な問題行動」とに大別し、その理解、かかわり、指導ということについてまとめられています。その中でも特に、学級担任としての動き、そして学級担任を取り巻く教師の動きについて、情報交換・校内事例研究会等の、具体的な論述が見られます。「生徒の理解と方法」についても、いくつかの項目と視点をあげて、指導につなげるための手立てを紹介しています。「指導の連携」については、幅広く関係機関を説明し、柔軟な指導の一端を学校と家庭の接点に位置付けております。これは、今後の指導のあり方に貴重な情報を提供するものであり、「連携」については、更に今後、教育相談とその指導の方針について重視していきたいところです。

文部省の平成4年度の児童生徒指導に関する調査の報告においては、増加の傾向にある不登校生徒をはじめとする「児童生徒指導上の問題行動」について、各現場における指導や取り組みについて再点検を行い、より適切な措置を講じることや、教師一人一人の自覚や責任感をもっての指導の充実、思いやりや正義感を育む指導等について積極的な推進を重視しております。

本論文は、主として中学校における校内指導体制を論じているものですが小学校においても十分、参考になるものです。今後、各学校において、理論と実践を通して、ますます児童生徒指導の充実が図れることを期待します。